特別連載

「音楽とともに生きる」

世界が未知の病に震撼した2020年。「音楽は不要不急」の言葉が飛び交う中でも、音楽が人の心を癒やし、分断をつなげ、深く精神を成長させ鼓舞してくれることを知り演奏を届けることに生涯を捧げる音楽家たち。本コーナーでは、音楽に一生を捧げ、さまざまに困難を抱えながらも立ち向かい生きる演奏家たちの姿をお届けしていきます。

Episode
1
ヴァイオリン奏者
山内祐子さん
談：山内研自
（東京フィル ホルン奏者）

2020年10月8日、東京フィルで35年にわたりヴァイオリン奏者をつとめた山内祐子さんが、がんとの闘病の末に逝去されました。夫であり東京フィル入団以来同僚として共に演奏活動を続けてきたホルン奏者・山内研自の談話と共に故人を偲びつつ、演奏家としてのキャリア、そしていのちと向き合ったヴァイオリニストの軌跡を見つめます。

「1985年から35年間にわたり東京フィルのお客様の前で演奏してきた妻山内祐子は昨年10月8日に帰らぬ人となりました。6年あまり前に乳がんが見つかってからも様々な治療を続けながら昨年3月まで演奏を続けてきましたがコロナ禍で活動がなくなっている間に症状が進み力尽きました。何よりもオーケストラで演奏することを愛した妻は、ヴァイオリン奏者フォアシュピーラーとして、キャリア前半を第一ヴァイオリン、その後本人の要望で第二ヴァイオリンで活動しました。オーケストラの音楽に様々な角度から関わることで自分のスキルを高めたいという気持ちが常にあったのだと思います。オーケストラで演奏する楽しさと充実感を子どもたちに知ってもらうことへの活動は、妻の演奏家以外のキャリアでとても大切にしていることでした。かつての東京フィルファミリーオーケストラへの献身的な関わりをはじめ、様々なジュニアオーケストラでも指導に熱意を注ぎ、葬儀にはそれらの若い演奏家達もたくさん参列してくれました。妻でありながら心から尊敬出来る音楽家でもありました。東京フィルのお客様におかれましては今まで長いあいだ妻の演奏する音楽を聴いていただいたことに対し心より感謝申し上げます」　（ホルン奏者　山内研自）

第1回　創立100周年記念ワールドツアー直前の定期検診で

「最初に異常が見つかったのは2014年の2月です。夫婦で毎年受けていた定期検診、乳がんの触診で『ちょっと気になるところがあるから精密検査を受けた方がいいですよ』という結果になりました。その時は二人とも『まさか』という感じで深刻なことはあまり考えていなかったのです。

ホルン奏者 山内研自
2020年「第九」特別演奏会にて　©上野隆文

その年の3月、東京フィルは創立100周年記念事業としてのワールドツアーを控えていましたが、妻は実はこの演奏旅行には参加できませんでした。娘がまだ中学3年生で、卒業式も控えており、中学生の子どもたちを置いて親が二人とも海外に行ったままというわけにもいかず、私だけがツアーに行きました。私からは出発前に『精密検査を受けてね』ということは言っていましたが、妻はツアーに参加できないことを非常に悔しがっていて、ちょっと意固地になっているようなところもあったのです。それでも、このツアーの間に検査に行ってくれました。

はっきりと結果が出たのはツアーから戻ったその日。私が家に帰ると同時に、病院に行っていた妻から連絡があり、すぐに病院に来て欲しいと言われ病院に駆けつけました。そして、医師からの診断結果――乳がんであるという確定の診断結果を聞きました。そこから、どのように治療するかということで医師とも話をし、詳しく検査したところでは乳房以外への転移はないという診断結果が出たので、治療の選択肢としては手術して全摘するのが一番良いであろうということになりました。手術を受けたのは2014年の4月です。

2014年東京フィル創立100周年ワールドツアー
ロンドン公演より　©Clive Barda

仕事はその時、2か月ほど休んだでしょうか。ワールドツアーに参加していなかったこともあって、同僚で病気のことを知っている人はほんの一握りだったと思います。復帰はその年の6月か7月くらいだったと思うのですが、大多数の同僚はそんなこと全く知らないで、『久しぶりに会いましたね～』くらいの感じで済んでいたのではないでしょうか。

「演奏家としてお客様の前で演奏し続けてこられたということに、心から感謝」

本人は、仕事に戻ることについては本当に前向きでいたと思います。

2007年から第二ヴァイオリンフォアシュピューラーとして活動した ©上野隆文

もともと体はいたって丈夫な方で、ほとんど病気をしたことはない人でした。まさかそんな大病を患うとは思ってもいなかった。ふだん健康だから大丈夫だということではないのだなと、改めてその怖さを知りました。いわゆる生活習慣病のようなものであれば、日頃から健康診断で数値が悪いことを指摘されるかもしれませんが、がんはそういうものとは関係ない。ある日突然宣告されるという事態になるのだということを改めて実感しました。

入団したのが1985年ですから、そこからもう35年間。長きにわたって東京フィルを聴きにきてくださっているお客様が今までたくさんいて、私たちは聴いてくださる方がいて初めて成り立つ仕事ですから、そうして聴き続けていただいたお客様には、感謝の気持ちしかないです。

お客様の前で演奏することは、私たちにとっては喜びでもありプレッシャーでもあります。常に自分のクオリティやモチベーションを維持し続けるということは、実はなかなか大変な作業ではあるのです。けれども、定期演奏会のお客様の前に立つということは、「東京フィルの」演奏を聴きにきてくださっている方々の前で演奏するわけですから、気持ちも引き締まります。お客様の前でずっと演奏できたということは、演奏家として、とてもやり甲斐があり、ありがたいことでもあり、私たちが音楽を頑張っていこうというモチベーションになる一番の原動力です。そのような機会を35年間にわたって続けてこられたということには、心から感謝したいと思いますし、妻も、きっとそのように思っていると思います」。 〈続く〉

山内祐子さんが出演した最後の定期演奏会は2020年1月定期演奏会。第二ヴァイオリンの2プルト内側に座る ©上野隆文

特別連載

「音楽とともに生きる」

世界が未知の病に震撼した2020年。「音楽は不要不急」の言葉が飛び交う中でも、音楽が人の心を癒やし、分断をつなげ、深く精神を成長させ鼓舞してくれることを知り演奏を届けることに生涯を捧げる音楽家たち。本コーナーでは、音楽に一生を捧げ、さまざまに困難を抱えながらも立ち向かい生きる演奏家たちの姿をお届けしていきます。

Episode
1
ヴァイオリン奏者
山内祐子さん
談：山内研自
（東京フィル ホルン奏者）

2020年10月8日、東京フィルで35年にわたりヴァイオリン奏者をつとめた山内祐子さんが、がんとの闘病の末に逝去されました。夫であり東京フィル入団以来同僚として共に演奏活動を続けてきたホルン奏者の山内研自の談話と共に故人を偲びつつ、演奏家としてのキャリア、そしていのちと向き合ったヴァイオリニストの軌跡を見つめます。

後編　演奏活動とジュニアオーケストラ

私たちは東京藝術大学の同級生として出会いました。当時は“ソリストになることが成功者”といった価値観が中心的だった藝大の弦楽器の中にあって、私たちの学年はオーケストラが好きな人が多かったです。妻もその一人でした。そして私と妻はほぼ同じ時期にあったオーディションで合格し、東京フィルに入りました。

東京フィル2008年機関紙「公私ともに名パートナー!?」より

妻は東京フィルでは第一ヴァイオリン奏者として活動を始めました。入団した頃はコンサートマスターを除いてはまだ首席などの制度はありませんでしたが、その後、いわば“初代”第一ヴァイオリンのフォアシュピーラー（※）になりました。そしてオーケストラ人生の半分近くまできた頃に、第二ヴァイオリンのフォアシュピーラーに移りました。当時、優秀な若手フォアシュピーラーが第一ヴァイオリンに入団し、第二ヴァイオリンのフォアシュピーラーが定年退職されるというタイミングでした。

※フォアシュピューラー：主に、コンサートマスターや弦楽器の首席奏者の隣で弾き、トップ奏者の補佐をする役割。次席奏者とも。

「その時その時で
自分の役割を少し変えて、
全体のバランスを考えて
組織のためになる
ことをやっていく」

2つのパート譜を立体的にイメージ。

オーケストラ人生の前半をファーストで、後半をセカンドで、と思っていたとおり、去年の4月からセカンドのフォアシュピーラーを務めています。ファーストを体験しているので、セカンドの楽譜を見ても、「このメロディーはファーストのあそこから来ているな」というように立体的にわかり、オーケストラとの一体感が強くなり、1つの星しか見えなかったのが銀河系全体が見えるようになったぐらい、音楽感が広がりました。頭の中にはいつも、ファーストでもセカンドでもない、自分だけの「メロディー譜」をもイメージしていて、それはセカンドのフォアシュピーラーとしても役立っています。

山内 祐子さん
第2ヴァイオリン

東京フィル2008年機関紙「フォアシュピーラーの仕事、教えます」より

ヴァイオリンセクションでも、第一と第二では音楽に対するアプローチが違っていて別の面白さがある。妻はそのことを小さい頃からオーケストラに関わって知っていて、第一ヴァイオリンの経験をきちんと積んだ後で今度は第二ヴァイオリンを経験させてもらいたいという気持ちだったと思います。それと同時に、オーケストラという集団の中の演奏家として、その時その時で自分の役割を少し変え、全体のバランスを考えて組織のためになることをやっていくことも考えたのでしょう。とても意義のある考え方で、そのことを口には出さないまでも身を以て示した妻を私は立派だったと思っています。

東京フィルでは演奏活動と同時に『ファミリーオーケストラ』にも積極的に取り組んでいました。夏休みの本番に向けて子供だけでなく家族の参加者を募って、みんなで練習して取り組むという催しで、例えばマエストロ チョン・ミョンフンらの指揮で本番がやれるということで、参加者もモチベーション高く参加してくれていました。

妻は北九州の出身で、地元のアマチュアオーケストラに子供の頃から所属していた経験があり、子供たちにオーケストラの楽しさを知ってもらいたい、オーケストラで演奏するのは大変なこともあるけど、本当にみんなと楽しく音楽ができるんだよ、ということを伝えたかったのではないかと思います。東京フィルのファミリーオーケストラでもヴァイオリンの中心的な立場で関わっていました。また地元の相模原で組織されたジュニアオーケストラにも熱心に取り組んでいました。これら子供たちのオーケストラへの関わりは、妻が最も大切にしている音楽活動でした。

振り返ると、さほど幅広い交流ではないものの、彼女の人との関わり方は一つ一つの繋がりが『濃い』ものだったように感じます。亡くなった後に子供から大人まで何人もの生徒さんからお手紙やメールをいただいていますが、『とにかくできないことはとことんまで見ていただいた』と皆さま口を揃えておっしゃいます。関わる方々との繋がりを徹底的に大切にするという妻のポリシーを感じます。

子どもたちにオーケストラの楽しさを知ってもらいたかった

2007年ファミリーオーケストラでの練習より

Epilogue 闘病、家族との時間

今の時代、医療の進化も目覚ましいので、乳がんもたくさんの治療法が存在しますから、お医者様と相談して、例えば『手に痺れが起きやすい』といったリスクのある治療は可能な限り避けるなど、様々な治療をしてきました。妻は最後まで「ヴァイオリンの演奏ができなくならないよう」、気にしながら病と闘っていました。しかし昨年春以降の病状の進行は私から見ても急だなと感じていました。

会社員の息子は出勤が続いていましたが、コロナ禍で私は仕事が少なく、大学生だった娘もオンライン授業になるなどで家にいることが多く、亡くなる直前に家族がそばに居られる時間が多かったのはせめてもの幸いでした。

二人の子供の育児、今思うとよくやってきたなあと思います。この仕事は夜遅いのが子育てのネックになります。保育園だけでなく、自治体の家庭福祉保育、双方の親、ベビーシッターさん含め、多くの方の助けを借りてなんとかやってきました。おかげさまで家族4人でファミリーオーケストラに参加するなど楽しい時間も過ごせました。お世話になった方々には心から感謝しています。

東京フィルのお客様の中にもご病気と闘っている方、ご家族が治療を頑張っているのを支えておられる方などもいらっしゃるかもしれません。その方々に東京フィルの音楽が少しでも癒しとなって届くよう、妻も天国から見守りながら願っているのではないかと思います。

本記事の前編は2021年1月の定期演奏会プログラムに掲載しております。ご希望の方は主催者までお声かけください。東京フィルウェブサイト「WEBで楽しむプログラム」からもご覧いただけます。